

# よりよい社会の実現を目指す子が育つ社会科学習 ～子どもが社会とつながる授業を通して～

岐阜県小学校社会科研究部会

## 1 研究主題について

私たちを取り巻く環境は目まぐるしく変化し続けている。今の子どもたちが社会で活躍する頃には、我が国は少子高齢化や環境・エネルギー問題など社会の諸問題を乗り越えるための厳しい挑戦を強いられるとともに、グローバル化の進展や人工知能（AI）を含む急速な技術革新等により、社会の構造や雇用環境が大きく変化し、未来の予測が困難な時代となっていることが考えられる。

このように先行きが不透明な時代にあって、身の回りにある社会の諸問題に主体的に向き合おうとする態度や、よりよい社会を創り上げるために他者と協働して課題を解決したり、社会への関わり方を選択・判断したりする力を子どもたち一人一人に培っていくことが求められている。

私たちはこれまで、「人間の生き方を問い続ける子が育つ社会科学習」を掲げ、感動やあこがれを生み出す人物との出会いを通して、自らの生き方につなげていく子の育成を目指してきた。この「人間の生き方」に迫りながら社会的事象の意味を深く追究する学習を大切にしつつ、先述のような社会の現状を踏まえたとき、社会的事象を自分のこととして受け止め、自分と社会とのつながりを感じながらそれらを解決したり、これからの社会の在り方や社会への関わり方、自分の生き方を考えたりする学習が重要であると考えた。このような学習を通して、急速な時代の変化や身の回りにある社会の諸問題に適切に対応し、どの子どもが主体的に社会に参画し、よりよい社会を実現するための資質・能力の育成が図られると言える。そこで、研究主題「よりよい社会の実現を目指す子が育つ社会科学習～子どもが社会とつながる授業を通して～」を設定した。

また、このような子どもの姿を目指していくことは、学習指導要領の改訂に伴ってより具体化された「公民としての資質・能力の基礎」を育成することにつながるものと考えている。

【図表1「研究主題の具現に向けて」】

岐阜大会研究主題

## よりよい社会の実現を目指す子が育つ社会科学習 ～子どもが社会とつながる授業を通して～

### よりよい社会の 実現を目指す子

「社会的事象の見方・考え方」を働かせながら、社会的事象の意味を多角的に追究すると共に、よりよい社会の在り方について考え、自らの生き方につなげていく子

### 子どもが社会とつながる授業

社会的事象を、既習内容、生活経験を基に、人々の生活、社会に見られる諸問題等と関連付けて捉え、見通しをもって社会的事象の意味を多角的に追究したり、社会への関わり方を選択・判断したりする授業

研究実践の5つのキーワード  
「自分」・「見通し」・「関連」・「多角的」・「選択・判断」

### “子どもが社会とつながる授業”の具現に向けた研究内容

研究内容 1	教材化や単元構成の工夫
研究内容 2	学習活動の工夫
研究内容 3	指導・援助の工夫

## 2 研究内容

### <子どもが社会とつながる授業の具現に向けて>

研究内容1 教材化や単元構成の工夫
① 社会的事象を自分のこととして捉えることができる教材の開発 ② 「社会的事象の見方・考え方」を明確にした単元構成表の作成
研究内容2 学習活動の工夫
① 社会的事象を関連付けて捉え多角的に考える学習活動 ② 社会への関わり方を選択・判断する学習活動
研究内容3 指導・援助の工夫
① 社会とのつながりに気付く「3つの見届け」 ② 学習環境の工夫

## 3 研究内容と方法

### (1) 研究内容1について

研究内容1 教材化や単元構成の工夫
① 社会的事象を自分のこととして捉えることができる教材の開発 ② 「社会的事象の見方・考え方」を明確にした単元構成表の作成

#### ① 社会的事象を自分のこととして捉えることができる教材の開発

子どもが社会とつながるためには、各単元で取り扱う教材を、子ども自身が自分とのかかわりでとらえることが大切である。

そこで、次のような社会的事象を取り扱えば、子どもが社会的事象を自分のこととして捉えることができる授業を具現することができると考えた。

- ①社会に見られる問題を通して、そこへの関わり方を考えることができるもの
- ②人の生き方に感動やあこがれを生み出すことができるもの
- ③既習内容や子どもの生活経験に関連するもの

そこで、【図表2】のように子どもと社会とのつながりを整理し、【図表3】のように各学年における教材例を考えた。

【図表2 「子どもが社会とつながるための教材の在り方」】

社会とのつながり	開発上の留意点
・身の回りで起きている出来事や社会に見られる諸問題と自分の生活とのつながりを考える。	・大人でも解決困難な課題になっていないか。
・人の生き方に感動やあこがれをもち、これからの自分の生き方や社会への関わり方を考える。	・人物の学習をするのではなく、一般化して考えることができるか。
・これまでに学習した内容、自分の知識・技能、自分の経験等とのつながりから、社会に対する認識をさらに広げたり深めたりする。	・子どもの実態を把握し、広げたり深めたりする認識を明確にすることができるか。

【図表3 「各学年の教材例」】

年	単元名	具体的な教材例
3	ものを売る仕事	スーパーマーケットにおける多種類の商品販売
	ものをつくる仕事	農業の機械化と手作業を続ける農家
	のこしたいもの つたえたいもの	国の登録有形文化財に指定される町屋
4	事件や事故からくらしを守る	巡回指導を大切にする警察
	ごみのしよりと利用	細かなごみを残さず集める清掃作業員
	きょう土をひらく	地域の用水開発や河川改修工事に携わった人物
	特色ある地いきと人々のくらし	結の精神を大切にし、世界遺産としてのまちづくりを行う白川村
	特色ある地いきと人々のくらし	伝統的な和紙の技法と町並みを残す美濃市
5	低地の人々のくらし	水とのたたかひのなかで生まれた堀田や水を生かしたまちづくり
	米作りの盛んな庄内平野	農業従事者の高齢化や有機農法
	これからの食料生産とわたしたち	食料自給率と輸入自由化
	わたしたちの生活と森林	森林資源の活用と森林環境の保全
6	世界に歩みだした日本	足尾銅山鉍毒事件に立ち向かった田中正造
	長く続いた戦争と人々のくらし	戦争体験や当時の生活を語り継ぐ人物
	私たちの願いを実現する政治	どの年齢の人々にも利用しやすい工夫をする公民館
	世界の未来と日本の役割	技術支援を行う青年海外協力隊

社会的事象を自分とのかかわりで捉えやすくするためには、他教科や他の領域との関連を考慮して教材化を図ることも有効である。

例えば、総合的な学習の時間における「郷土学習」と関連させて、「住んでいる地域と自分とのつながりを考える教材」を開発すれば、総合的な学習の時間で学んだことと社会科で学んだことを関連付けて考え、より深く地域とのかかわりを意識することができる。また、「食育」で学んだ「地産地消」と関連させて「食料自給率と自分の生活とのつながりを考える教材」を開発すれば、社会科で学んだ内容だけでなく、食育の時間で学んだ「地産地消」も含めて解決方法を選択・判断することができる。

このように、子どもと社会のつながりを、社会科だけで考えるのではなく、教科等横断的な学習の視点も取り入れることができれば、より効果的に、子どもが社会とつながる教材を開発することができる。

## ② 「社会的事象の見方・考え方」を明確にした単元構成表の作成

子どもが社会的事象を自分のこととして捉え、社会とつながる授業を行うためには、社会的事象の特色や相互の関連、意味について多角的に追究したり、社会への関わり方を選択・判断したりする授業を行うことが大切である。このような授業を行う場合、子どもが考えたり、選択・判断したりする際の“基準”となる視点（「社会的事象の見方・考え方」）を教師が明確にして授業を構成し、資料づくりや発問といった教師の指導・援助につなげていくことが求められる。つまり、「社会的事象の見方・考え方」を明確にした単元構成表の作成は、教師が授業をどのようにデザインするかを目的とする。

そこで、単元あるいは単位時間の中で、どのような「社会的事象の見方・考え方」を働かせて追究するのかを明確にし、追究の「視点」として単元構成表に位置付けることとした。

ここで言う「社会的事象の見方・考え方」や「視点」は次のとおりである。

「社会的事象の見方・考え方」 （「小学校学習指導要領解説」社会編より）

社会的事象の意味や意義、特色や相互の関連を考えたり、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて社会への関わり方を選択・判断したりする際の「視点や方法」。

【視点の例】（中教審「社会科、地理歴史科、公民科ワーキンググループ」補足資料より）

【位置や空間的な広がり】

地理的位置、分布、地形、環境、気候、範囲、地域、構成、自然条件、社会的条件、土地利用など

【時期や時間の経過】

時代、起源、由来、背景、変化、発展、継承、維持、向上、計画、持続可能性など

【事象や人々の相互関係】

工夫、努力、願い、業績、働き、つながり、関わり、仕組み、協力、連携、対策・事業、役割、影響、多様性と共生など

視点は、「位置や空間的な広がり」、「時期や時間の経過」、「事象や人々の相互関係」の三つの視点に分類される。扱う教材を「どのような視点から、どのような方法で追究するのか」という授業デザインを明確にする。そうすることで、単元あるいは単位時間の授業構成や教師の指導・援助が明確になり、社会的事象の特色や相互の関連、意味を多角的に考察する力や社会に見られる課題について、社会への関わり方を選択・判断する力を育成できると考える。

注)「方法」とは比較、分類したり総合したりして追究することや地域の人々や国民の生活と関連付けたりして追究すること

追究の見通しと「社会的事象の見方・考え方」を明確にした単元構成表を作成するに当たり、次の点に留意するとよいと考えた。

【単元構成表作成上の留意点】

- ①単元学習前と後の子どもの意識を描く。
- ②単元を貫く課題を設定する。
- ③単位時間の課題を明確にする。
- ④考えられる発言と視点を関連付ける。
- ⑤押さえない用語を明確にする。

次の「図表4」は、5年生「環境を守るわたしたち」という単元における単元構成表の例である。

単元学習前の子どもの意識では、既習単元「自動車をつくる工業」における企業等の環境への取組や日常生活における子どもの環境への取組を挙げている。単元学習後、日本の経済発展や人々の生活様式の変化により、環境が著しく変化した背景や行政や企業、市民の協働により、環境を守るために努力が必要であると考えられるよう構成している。

そのために、「公害や環境汚染の背景」と「環境を守るための私たちの在り方」の2つについて、単元を貫く課題を設定している。単元を貫く課題を設定することで、見通しをもって主体的に追究できると考えた。中心となる学習を第5時と設定し、それまでに基礎的・基本的な知識や概念をどの時間で学習するか、そのためにはどのような「社会的事象の見方・考え方」を働かせるかを明確にして【 】内に位置付けている。

このように、子どもの意識や基礎的・基本的な知識・概念、追究の視点を明確にすることで、社会とつながる授業の具現に向かうと考えた。授業者が、あらかじめどのような「社会的事象の見方・考え方」を働かせるのかを明確することで、単位時間における資料作成や発問など、教師の指導・援助が明確になる効果が生じると考えた。

【図表4 「追究の見通しと『社会的事象の見方・考え方』を明確にした単元構成表】

単元構成表（全5時間） ○：押さえない用語 【 】：視点

<p><b>単元名</b> 環境を守る わたしたち</p>	<p><b>単元学習前の子どもの意識</b> 町では、「子どもサミット日」には、地域のために、ゴミ拾いをしている。「自動車をつくる工業」の学習では、排気ガスが減少すれば二酸化炭素が減少し、地球温暖化防止につながることを学習してきた。環境についていろいろな人が取り組んでいるのは知っているけれど、私たちにも何かできることはないのかな。</p>	
<p>【第1時 鴨川的环境汚染と公害問題】 1970年ごろの日本の環境について知り、単元の学習の見通しをもとう。 【位置・分布】 ・1970年代の日本は各地で、環境が悪化しており、岐阜県の河川でも同じようなことがあった。 ・四大公害病のように、多くの人が苦しむような問題が起きていたなんてはじめて知った。 【背景】 どうして公害や環境汚染が進んでしまったのだろう。また、どのようにして環境をよくしていったのか。 ○公害 ○BOD ○四大公害病 ○水俣病 ○四日市ぜんそく ○イタイイタイ病 ○新潟水俣病</p>		
<p>【単元を貫く課題】 どうして公害や環境汚染を防げなかったか。 環境を守るためにわたしたちができることは何か。</p>	<p>【第2時 汚れていた鴨川的环境】 どうして鴨川は汚れていたのだろう。 【背景・発展】 高度経済成長の時、工場の排水により、鴨川の水も汚れていた。 【関わり】 市民も環境に対する意識が低く、川にゴミを捨てていた。 【協力】 美しさを取り戻すために、どのような取組をしたのだろう。 ○高度経済成長</p>	<p>【第3時 美しくなった鴨川的环境を守る取組】 美しくなった鴨川を守るために、どのようなことを行っているのだろう。 【対策】 鴨川を守るために、行政は条例を決めた。 【働き】 Sさんたちは、鴨川を守る運動や納涼祭を行っている。 【協力】 行政とSさんたちは協力して取り組んでいる。他の市民も協力しているのではないかな。 ○条例 ○京都議定書 ○新景観政策 ○鴨川を美しくする会</p>
	<p>【第4時 京都市における食用油の回収について】 私たちが多く捨ててしまう油を、なぜ京都では市バスやゴミ収集車に使っているのだろう。 【努力】 京都では、多くの市民も自宅の前で使用済み油を回収していた。 【仕組み・願い】 24時間いつでも回収できる場所をつくることで、少しでも環境をよくすることに貢献したいという市民の思いがあるからだ。 【協力】 京都議定書の取組のもと、Tさんのように、自分の地域の環境を守るために、自分からできることをしようとする市民や行政の努力や協力があることが分かった。 ○バイオディーゼル燃料化 ○地球温暖化 ○二酸化炭素排出量 ○緑のカーテン</p>	
	<p>【第5時 環境保全のためにできること】 京都の環境に対する取り組みを振り返り、これからの環境を守るために、私たちにできることを考えよう。 【持続可能性】 ・行政は、下水道をつくったり、条例を制定したりして、環境に対するきまりをつくった。 ・工場では、川を汚さないように地下水をくみ上げて洗っている。洗った水は下水道に流していた。 ・鴨川を美しくする会では、鴨川をきれいにするだけでなく、これからもきれいな鴨川になるように、取り組みを続けている。 ・京都市民は、使用済み油を回収するだけでなく、自宅前を回収場所にして、少しでも地球温暖化に貢献しようとしていた。 ・環境を守るために、緑のカーテンを行ったり、資源回収を行うことで、ゴミを資源として再利用したりしていきたい。</p>	
	<p><b>単元学習後の子どもの意識</b> 経済発展や人々の生活様式の変化によって、日本各地で、環境汚染や公害が起こったことが分かった。今もなお苦しんでいる人々がいることも知った。自分たちの住む地域の環境を守り、住みよい環境を守っていくためには、行政や企業、市民が同じ思いで協力し、環境を守る努力をし続けていくことが大切なのだと学んだ。Tさんのように、自分にできることを続けることで、環境はよくなっていく。今まで、子どもサミットの日にはゴミ拾いをしていたけれど、Tさんのように、自分から活動することで地域の環境はよくなっていくという意識をもって、活動を続けていきたい。</p>	

## (2) 研究内容2について

研究内容2 学習活動の工夫
① 社会的事象を関連付けて捉え多角的に考える学習活動
② 社会への関わり方を選択・判断する学習活動

子どもたちは、社会的事象の見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする学習活動を通して、社会的事象の特色や相互の関連、意味を理解していく。その際に、学習過程の中で立ち止まり、様々な社会的事象の相互の関連性や、子どもと社会的事象の関連性などを深く考える場を設けたり、これまでの学習内容を踏まえて自分自身の社会への関わり方を選択・判断したりする場を設けることが有効であると考えた。

そこで、次のような学習活動を、単位時間あるいは単元の終末に意図的に設定し、教師の適切な働きかけを行うことにより、子どもが社会とつながる授業の具現を目指した。

- ① 社会的事象を関連付けて捉え多角的に考える学習活動
- ② 自分の社会への関わり方を選択・判断する学習活動

### ① 社会的事象を関連付けて捉え多角的に考える学習活動

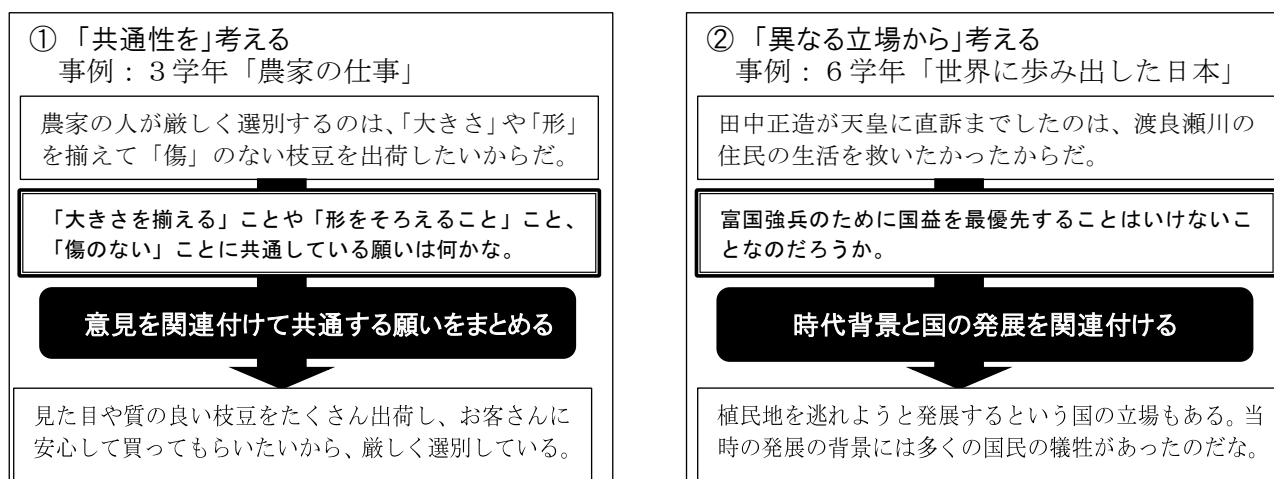
子どもたちが社会とつながるためには、取り上げた社会的事象の相互の関連や意味を深く理解することが大切である。そこで、単位時間（「思考力・判断力・表現力等」を養う授業を中心として）の中で、社会的事象の相互の関連や意味などについて、対話的な学びを通して、様々な立場や意見から多角的に考える学習活動を意図的に設定することとした。

その際、それまで追究してきた内容を集約したり、複数の立場や意見を踏まえて考えたりすることができるように、その必然性を生み出す教師の発問を行うこととした。（図表5・6）

【図表5「教師の発問の視点例」】

①「共通性を」「順序性を」考える 様々な立場や意見の共通点や中心点に着目し、社会的事象の意味についての考えを集約する。
②「異なる立場から」考える 様々な立場の人に着目し、社会的事象の意味や相互の関連について考える。
③「他の事象から」考える 別の社会的事象に転移して一般化を図り、他の社会的事象との相互の関連を考える。
④「自分との関わりから」考える 自分と社会的事象との関わりを見つめ、社会的事象の意味と自分の生活との関連を考える。

【図表6「教師の発問の具体例」】



③ 「他の事象から」考える  
事例：5 学年「自動車をつくる工業」

T社が多額の費用と時間をかけて、水素車を開発したのは、未来の地球環境を考えたからだ。

**他社が費用と時間をかけて開発した電気自動車技術は、どんな未来をつくるためのものだろう。**

**自動車工業と国民生活、持続可能性のある社会づくりを関連付ける**

日本の自動車工業は未来の国民生活を考えた新たな車づくりの努力をして国民生活を支えている。

④ 「自分との関わりから」考える  
事例：4 学年「ごみの処理と利用」

市が雑がみ回収に力を入れているのは普通ごみに混じる資源を再利用し、市のごみを減らすためだ。

**単元のはじめに行ったあなたの「我が家のごみ調べ」を見て見よう。**

**市の対策と市民の協力を関連付ける**

自分の家でも、もっと雑がみを分別できる。市のごみを減らす対策に少しでも協力していきたい。

## ② 社会への関わり方を選択・判断する学習活動

子どもが社会とつながるためには、社会に見られる課題を把握し、その解決に向けて、自分自身の社会への関わり方を選択・判断する力を養うことが大切である。

そこで、単元の終末において、「自分自身はどのように関わるべきか」「社会の在り方はどうあるべきか」などを考えたり、選択・判断したりする場を意図的に位置付けることとした。

その際、単なる思いつきや根拠のない考えではなく、単元を通して身に付けてきた知識や深まった社会認識を基に、「社会的事象の見方・考え方」を働かせながら社会への関わり方などについて選択・判断できるようにしたい。その中で、教師は、視点や方向を明らかにし、子ども達の話し合いがより充実するものとなるよう、指導・援助していく必要がある。

以下の「図表7」は、単元の終末において、これまで学習してきた「事故の原因」「事故の様子」「警察の働き」「地域の方々との連携」「地域の方々の願い」などを基に、自分にできることを「選択・判断」した授業の一例である。

【図表7 「単元の終末に位置付けた例」】 3・4年生「事件や事故からくらしを守る」

<p>＜課題＞ 事故の少ないまちにするために、私たちには、どんなことができるだろう。</p>	
<p>＜子どもの事故の原因＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>子どもの事故の原因は、自転車による飛び出しが一番多かった。だから、まずは自分たちが事故に遭わないように気を付けることが大切だと思う。</li> </ul>	<p>＜被害者の年齢の割合＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>事故の被害者は、高齢者の割合が高かった。私の家にもおじいちゃんがいるから、出かけるときには気を付けるように、声をかけていきたい。</li> </ul>
<p>＜警察の仕事＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>警察は、事故が起こりやすい時間帯や場所を重点的にパトロールしていることが分かった。だから、これからは、まちでパトカーを見かけたら、特に注意していきたい。</li> </ul>	<p>＜見守り隊の方の願い＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>見守り隊の〇〇さんは、私たちにも協力してほしいと話していた。話を聞いて、自分たちが気を付けるだけでなく、低学年の子にも、自分から、安全に気を付けるように声をかけていきたい。</li> </ul>

### (3) 研究内容3について

<b>研究内容3 指導・援助の工夫</b>
① 社会とのつながりに気付く「3つの見届け」
② 学習環境の工夫

#### ① 社会とのつながりに気付く「3つの見届け」

各学習過程において社会とのつながりを実感するために、本時までの「実態」、本時の「学習状況」と「定着状況」の3つの見届けの場における指導・援助を明確にした。

【図表9「学習過程における見届けと指導・援助」】

<b>実態の見届け</b>		
<既習内容の定着状況を見届ける>・何を身に付け、どのような考えをもっているか。 ・生活経験や既習内容とどのように関連付けているか。		
<b>学習状況の見届け</b>		
過程	見届ける姿	社会とのつながりに気付くための主な助言
つかむ	既習や生活経験と関連付けて、課題意識をもっている。	・「数量や数値」、「人やものの様子（5W1H）」、などに目を向けるように助言、あるいは補足説明。
見通す	既習内容や生活経験と関連付けて予想している。	・「前の学習と比べて（つなげて）みるとどうか」 ・「自分の生活を比べて（つなげて）みるとどうか」
個人追究	必要な資料を選択し、事実に基づき、学習課題に対する考えをもっている。	・「どの資料から考えたのか」「どうして～と考えたか」 ・「前の学習と比べて（つなげて）みるとどうか」 ・「違う資料とつなげて考えるとどうか」
集団追究	他者の考えと比較・分類・総合したり、違う立場から考えたりして、多角的に追究。	・「～さんの考えと似ているところ（違うところ）は」 ・「～さんの考えについてどう思うか」 ・「～さんの立場から考えるとどうか」
<b>定着状況の見届け</b>		
まとめ	獲得した社会認識を基に、課題についてまとめている。	・「このキーワードを入れてみよう」 ・「～の一番の理由について書いてみよう」 ・「同じように言えることは他にもあるか」 ・「自分にできることは何だろうか」

#### ② 学習環境の工夫

子どもの実態や本時のねらいに応じて、以下のように、学習環境においても工夫を図ることで、社会とのつながりを捉えるのに効果を上げることができると考えた。

【図表10「学習環境の工夫 具体例」】

学習環境の工夫	目的	活用例
人材の活用	○人材との対話を通して、自己の考えを再構築できる。	・ゲストティーチャーと共に学習課題について考えを交流する活動
ICT 機器	○多様な情報の収集や選択、共有ができる。	・タブレットによる調べ学習 ・TV、プロジェクトでの資料の拡大提示
ホワイトボード	○仲間との対話で生まれた思考の過程を可視化できる。	・小集団で課題について考えたことを、交流し、まとめる活動
実物の提示	○より具体的な事実から、主体的に課題追究できる。	・浄水される前と浄水後の水の透明度の比較をする活動（4年「水はどこから」）
体験的な活動	○実感を伴った理解をもとに、課題追究できる。	・用水をつくった工事を体験したことを基に当時の人々の苦労を考える。（4年「郷土の発展につくした人々」）